The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大江文坡と源氏物語秘伝 ：〈学説寓言〉としての『怪談とのゐ袋』冒頭話
Author(s)	飯倉, 洋一
Citation	語文. 2006, 84・85, p. 108-118
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/50075
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大江文坡と源氏物語秘伝

――〈学説寓言〉としての『怪談とのゐ袋』冒頭話――

飯倉洋一

一　「奇談」史のなかの『怪談とのゐ袋』

明和五（一七六八）年、京の菊屋長兵衛が刊行した大江文坡の『怪談とのゐ袋』は、現状では一応（前期）読本に分類される（『改訂日本小説書目年表』ゆまに書房、一九七七年）。しかしこれはあくまで便宜的なもので、内容的には怪異小説の系譜に位置づけられようし、従来から指摘されるように[1]、その四分の三が仮名草子『宿直草』（『御伽物語』）の版下をそのまま使うか、少しの改変を施したものであることに着目すれば、仮名草子に分類する立場もありえよう。

本書は、明和九（一七七二）年刊行の『大増書籍目録』（京、武村新兵衛刊）の分類では「奇談」書七十六部のうちのひとつである。「奇談」は宝暦四（一七五四）年刊行の『新増書籍目録』（京、永田調兵衛刊）ではじめて立項された（五十七部収載）ジャンル名であり、明和の書籍目録はそれを引き継ぐが、そこに登載される書目は、現行の文学史でいえば末期浮世草子の一部・談義本・初期読本・仮名草子改題本などを含んでおり、混沌としている。

享保から明和にかけての、文学史的にはジャンル所属のはっきりしない、しかしながら外形的にはおおむね青色系表紙半紙本数冊で短編説話集の形式を持つという、一群の書物がある。これらは多く「奇談」書と重なってくる。ただしこの中には、現在の「奇談」の語感とちがうテクストも少なくない。ちなみに筆者は当時のジャンルとしての「奇談」の意味は「綺（あや）」ある「談（かたり）」の謂いと理解する方がよいのではないかと考えている[2]。

また現行の文学史と絡めて言えば次のように言えよう。すなわち、享保から明和にかけて「奇談」という器のなかでさまざまな試みが行われ、その中から教訓談義に特化した談義本、色談義に特化した初期洒落本、白話小説を取り入れた知的寓言の初期読本、

滑稽に特化した滑稽本が生まれたと。

「奇談」史を仮設したときにみえてくることは、拙稿「「奇談」史の一齣」（『日本古典文学史の課題と方法』（伊井春樹先生御退官記念論集刊行会編、和泉書院、二〇〇四年）にいくつか述べた。明和四・五（一七六七・六八）年ころから上方を中心に怪談ブームと称すべき現象が発生し、『怪談とのゐ袋』がその一端をになうこともその一つである。筆者はさらに、「奇談」の中に荘子の寓言を方法的に用いたテクストが多くみられることから、寓言あるいは寓言論の展開[3]を「奇談」史の中に追跡しようとしている。そのひとつの試みが拙稿「上方の「奇談」書と寓言―『垣根草』第四話を例に―」（『上方文藝研究』第一号、二〇〇四年）であった。そこでは、「奇談」書の中でも江戸では教訓を主意とする寓言が多いのに対し、上方では、衒学的な学説を主意とする寓言、とくに国学的知識の開陳が目立つことを述べ、その具体的事例として賀茂真淵の最新の学説を取り入れた、明和七（一七七〇）年京銭屋七郎兵衛刊『垣根草』第四話について考察した。

本稿で取り上げる大江文坡[4]著『怪談とのゐ袋』は、全四十話中三十話が、仮名草子『宿直草』所収話の再構成であるが、十話は文坡が新たに創作したものであると思われる。巻一の一「都聚楽の旧地ゆめ物語の事」（以下「聚楽ゆめ物語」と称する）もその一つであるが、本話は後述するように、書名の由来となった話であり、他の収載話とかなり異なる色合いをもつ説話で、冒頭に配されたことから文坡の意欲を感じさせるものといえよう。この冒頭話こそ上方の一部の「奇談」書に特徴的な、古典にかかわる学説を登場人物が述べるという〈学説寓言〉（この呼称は飯倉の造語）の形になっている。本書には他にこのような例話がない。

二　「都聚楽の旧地ゆめ物語の事」の〈学説寓言〉性

管見の限り「聚楽ゆめ物語」は従来翻字が公にされていないので、本稿に附載しておく。あらすじは以下のようである。

明和三年のこと、都の東岡崎に、龍田鴻齋という有徳の隠士がいた。和歌の奥義を論じることが好きで、源氏・伊勢・徒然・古今などの秘事を語っては自讃顔であった。一月下旬、松山春甫・池田立庵という同好の友と北野に詣でた帰り、転輪寺の茶所で、旧知の尼崎少休なるものに会った。三人は聚楽の旧地にある少休の庵に一宿する。夜中にゆりおこす者があり、一同に目を覚まして見れば、上下を着した少人が枕の上に立ち、周囲は金殿玉楼に変わっている。少人に引き立てられて奥に進むと、衣冠を着した貴人が座し、左右に列座する人々もいた。何人かと問うと、豊臣秀吉と臣下たちだという。秀吉は三人を召して、『源氏物語』榊巻に出る「とのゐものの袋」のことを下問される。鴻齋は、内裏の宿直の順番を知るための札を双六の筒のようなものに入れたのだという説を述べるが、秀吉はこれを否定し、『李部王記』を引いて、宿衣の袋のことであると説き、三人に伝授秘伝などと人をまどわす事なかれと戒める。三人は恐れて汗をかき御前を立つ

と、たちまち夢から覚めた。三人同夢のことを少休に語ると、少休は、客を泊めるたびに十人が十人太閤の聚楽の御所に参る夢を見る、それも奥の一間に臥す時に限ると語ったという。説話は単純な構成だが、夢中問答の中で登場人物に学説を語らせるという、典型的な寓言の方法で書かれているものである。さらにいえば上方の「奇談」に頻出する〈学説寓言〉に他ならない。ちなみに後藤丹治は〈学説寓言〉の一典型ともいえる『雨月物語』「仏法僧」に本話の影響を見ている（「雨月物語原拠私考」「学大国文」一九五八年一月号）。

文坡自身は寓言についてどういう認識を持っていたか。水谷不倒『草雙紙と讀本の研究』（一九三四年初版、本稿での引用は『水谷不倒著作集〈第二巻〉』中央公論社、一九七三年）は彼の作品を佚斎樗山とともに「寓意小説」の仲間に入れている。「別に分明な意味を有するものではないが、すべて物に托して説をなすもの、又或学説を敷衍する為に、戯作の体を仮りたものの如きをいふ。即ち佚斎樗山の『田舎荘子』の類である」と「寓意小説」を説明するが、これは寓言の方法を用いた「小説」ということに他ならない。さすがに慧眼であった。文坡の『抜参残夢噺』（明和八〈一七七一〉年、京刊）は、明和八年に大流行したおかげ参りの批判書である『抜参夢物語』（是道子作、明和八年刊）への反論として成ったものであるが、その序文には「是道子が神に託し僧に寓る譫語も」と、「寓」の字を用いて、『抜参夢物語』を寓言として捉えた一節が見える。文坡もまた猿田彦と弘法大師の問答として『抜参残夢噺』を構成しており、あきらかに寓言の方法を意識的に用いていたと言えよう。また、『成仙玉一口玄談』（天明五〈一七八五〉年、京刊）では、守一仙人を登場させ、聞き手にも箒良という魅力的な人物を配して、『和荘兵衛』（遊谷子作、安永三〈一七七四〉年、京刊）の続編を装いながら、あくの強い神仙教の教理を説く。途中守一仙人は文坡その人であることを暴露してしまう場面があって小説的結構が破壊されているようだが、寓言の方法からいえば実は問題はない。虚構の人物が作者と化すあたり、むしろ〈学説寓言〉の方法を熟知する書き手ならではと思わせるものがある。

「聚楽ゆめ物語」は一面では気質物浮世草子的な性格を持ち、一面では談義本的性格を持っている。有徳町人の学問好き・秘伝志向を描くのは気質物的であり、それが戒められるという形は談義本的である。しかし、『当世下手談義』や輩出したその追随作と比べると、学問の内容、つまり学説にまで踏み込んだ議論となっているところが上方初期読本に通じる。〈学説寓言〉と呼ぶ所以である。たとえば『雨月物語』の「仏法僧」らは考証的議論が顕わで、小説的な結構を破壊しているといわれるが、後半が「宿直物の袋」の考説で占められる本話もその部分が突出しすぎているといえよう。しかし、作者の主意は、小説的結構よりもむしろその学説の開陳にある。前述したようにそれが寓言というものだからである。

寓言とは、『荘子』「寓言篇」に淵源し、作者の思想（学説・教

理・諷諫・憤悶）を、虚構の人物（動物）や神仏あるいは古人に託して語る表現方法であると、ここでは言っておこう。それを自己の著作の方法として語るのは佚斎樗山『田舎荘子』（享保十二〈一七二七〉年、江戸刊）以来、談義本・初期読本の序文等に見られる。作者の意見を仮託する人物が秀吉であることに何か意味があるのかは後述する。ただ、彼らを自宅に招いた少休の名は、秀吉に近かった利休とその嫡男の少庵を合成した名であろう。また基本的には『宿直草』の改題本である『怪談とのゐ袋』が新たに増補した十話のうち、巻四の一には豊臣秀次が登場する「伏見桃山亡霊行列の事」（これも「仏法僧」の典拠とされる話）があることも留意されよう。さらに聞き手の鴻斎・春甫・立庵という人物設定についてもなんらかの意味があってしかるべきだし、聞き手のモデルを想定することもできようが、現在のところ突き止めていない。

「宿直物の袋」は「楊名介」「ねのこの餅」と並んで「源氏物語三箇秘伝」のひとつとされる。「秘事」を物知り顔に日ごろ語っていた鴻斎にとっては、蘊蓄を試すまたとない好機である。秀吉に言上した「愚説」は次の様なものであった。

とのゐものゝ袋と申は大内にて番をいたす我役の次第をしらんために札のやうにけづり双六の筒のやうなる物に入て持を申也。源氏の零落せられし時分にて候へば左様のばんなどもなきよしを申にて候ならん。

この説と同様の説を知らないが、「札」云々は『河海抄』に「殿上人宿直人の名字かきたる簡号日給簡を納むる袋の事なり云々」というのを敷衍したもののようである。

これに対して秀吉は「それこそ大きに心得たがえる事なり」と一喝し、次のように述べる。

李部王記に天慶九年九月十日蔵人右衛門尉中原助信が宿直の袋を詔して裂り給ふとあり。是は主上殿上の侍におはしまして助信が身にしたがふ裳の中の紅色すこぶる深かりしを御覧じて詔して裂しめ給ふとぞ。此記にはつゝみと有り。裳の字をつゝみとよむ。たゞ宿衣の袋の事なり。これを源氏にとのゐするものもやう〳〵稀になりしといはんとてとのゐものゝ袋おさ〳〵みえずとは書けり。若紫の巻にも宿直袋とりにつかはすとありて、ことなる義にあらざれども、秘事と云伝へたり。

秀吉の説は紛れもなく一条兼良『源語秘訣』の説の丸取りであった。文坡が伝授を受けた「源語秘決之写」（内藤記念くすり博物館所蔵『源氏物語三箇大事』中に引用、この本については後述）の本文で引用する。

北山抄云至于近衛次将帯剱上殿無妨仍宿侍之時副於宿物持上之。

李部王記天慶九年九月十日謂裂蔵人右衛門尉中原助信宿直衣云云昨夕主上御殿上侍披見助信可随身之裳中衣紅色頗深仍所破或云宿衣私物非人主可開看頗渉荷（イ苛）酷云云。

今案とのゐ物の袋の事宿衣の袋也ふくろをばつゝみ共いふ故

に李部王記にはつつみとあり。嚢の字をば則つゝみ共よむ也。さぶらひは殿上をいふ二条院の殿上なり宿直する人も漸稀になるといはんとてとのゐものゝふくろおさ〳〵見えすとはかけり。若むらさきの巻にもとのゐものとりにつかはすとあり。ことなる事もなきを秘事がましくいへる。今更云あらはさむもいかゞなれば別の見をしるす物色々の説あり。いづれも皆誤也。信用すべからず。（傍線飯倉）

寓言は、夢中問答の形をとることが多いが、三人同夢という趣向は珍しい。『繁野話』（明和三〈一七六六〉年）第三編「紀の関守が霊弓一旦白鳥に化する語」に三人同夢の話があり、これに影響を受けている可能性もある。西郷信綱『古代人と夢』（平凡社、一九七二年）によれば、二人同夢、三人同夢は最も信じられるべき夢であった。ここも怪異性を強めるとともに、鴻齋らにとって秀吉の言説に重みを持たせる意味があると見られる。

三　文坡と源氏物語

いったい作者文坡は『源氏物語』の秘説等にどの程度通暁していたのか。それを示唆する資料がある。

それは先述した内藤記念くすり博物館所蔵『源氏物語三箇大事』である。同書は半紙本墨付四十一丁の写本。外題はなく、①「源氏物語三箇大事」（「称名院殿御自筆之写」・「又一流伝授之写」・「源語秘決之」より三箇大事に関わる部分を抄出したもの。昌琢より寛佐へ伝授、寛佐より昌通へ伝授）、②「古今和歌集灌頂口伝」（東常縁より宗祇へ伝授）、③「百人一首五首秘決切帋」（貞徳・盤齋の在判）、④「伊勢物語七ケ之大事」（貞徳・盤齋伝授、天和二年夢鷗写）、⑤「徒然草三箇之秘決」、⑥「源氏物語三箇之大事・徒然草三箇の秘決」（源氏物語は実隆→兼良→肖柏→宗珀と伝授されたもの、徒然草は貞徳から伝授されたもの）から成る。そして全体の巻末識語（相伝奥書）として次のように記されている。

右源氏物語古今集百人一首伊勢物語徒然草等の秘設（ママ）予従和歌之師似雲（世称今西行隠于洛西嵯峨矣）伝授之焉今依懇望令書写秘授之漫不可許再伝者也

大江匡弼書之（印）

安永九庚子／七月中旬　　印（江氏匡弼）　印（文坡之章）

伝来所蔵書今亦依懇望再伝者也

紫燕藤重貞（花押）

天明六丙午下冬

署名の下には亀と蛇をあしらった花押風の墨印。ふたつの朱印とともに文坡の他著作に見えるものでもあり、[5] この奥書が文坡自筆のものであることは疑いない。

これによれば文坡は源氏物語・古今集・百人一首・伊勢物語・徒然草等の秘説を和歌の師似雲から伝授されていた、そして懇望によって今それを伝授するというのである。似雲は安芸広島の商

人河村彦右衛門の男。三十七歳で出家して源光寺住職となるが、その後上京して武者小路実陰に和歌を学んだ。文坡の奥書に見えるように「今西行」と称せられた。[6] 文坡が和歌を似雲に学んだことは寡聞にして知らない。伝記資料の乏しい文坡の一面を知る貴重な資料であろう。似雲は宝暦三（一七五三）年に没しているので、伝授を受けたとすればそれ以前のこととなり、それは寛政二（一七九〇）年に六十余歳で没したという（享年は不明）文坡の二十代くらいのことと推測されよう。

実陰の和歌についての言説を似雲が聞き書きした『詞林拾葉』の享保三（一七一八）年二月十九日の項に、

烏丸光栄朝臣御相対御物語をきゝしに「『源氏』にはきつと極りたる切紙もなし。『伊勢物語』は切紙あり。畢竟、『源語秘訣』にて皆すみ申候。然共是にてすむと云事も人に申さぬ事にて御座候。（下略）」

とあるのも『源語秘訣』第一主義と暗合する。実陰→似雲→文坡と、堂上から地下へと受け継がれてきた秘伝（『源語秘訣』自体が延宝年間に刊行されており、比較的広く読まれていたと推察されるので、「秘伝」というには実際はふさわしくないだろうが）が、〈学説寓言〉として開陳されたものである。『怪談とのゐ袋』の読者層としてどのような層を想定するかという問題と関わるが、『源語秘訣』説を述べる部分は文坡の衒学と矜持とを思わせる部分だとしてよいだろう。

ただひとつ問題として残るのは、なぜ秀吉に仮託するのかということだろう。秀吉は連歌や能が好きであったが、彼が源氏物語秘伝をはじめとする歌学に詳しい人間だと思う者は当時の読者の中にもいなかっただろう。[7] 一般的な寓言の効果からいって、ここで秀吉が源語秘説を語る効果は期待できない。一条兼良や紹巴などが出てきてしかるべきである。とすれば、あえて秀吉に仮託した理由は、正しい説を教えようとしている秀吉自身が『源語秘訣』をそのまま引用する程度の生半可な知識しかないこと、つまりは鴻齋らと同類にすぎないことを暗に示し、源氏物語秘伝の学説が諸説紛紛であることの無意味さを寓意したと取れないこともない。文坡自身に毒が回りかねないということにもなるが、いずれにしても、学説が生なかたちで示されたということがこのテクストの最大の問題提起であっただろう。

四　浮世草子に描かれる歌学嗜好

こういう〈学説寓言〉が出てくる背景には、学問が風俗的にも流行するという時代背景を考える必要があるだろう。歌学における地下の台頭、古典学の庶民層への浸透などが近世中期に顕著に現れ、これを材とした浮世草子もいくつか挙げられよう。

其磧『世間子息気質』（正徳五〈一七一五〉年、京刊）巻三の一「世間の人に鼻毛をよまるゝ歌人気質」は、歌学好きな江戸の商人助太郎が、船遊山の折に和歌を詠んだとき、公家に添削をお願いすればどうかと太鼓持ちの道鉄に勧められてその気になり、道鉄に旅費まで与えて公家への仲介を依頼する。京都見物だけを

して帰ってきた道鉄の「公家様は助太郎の詠みぶりの卑しさを指摘された」というでたらめを真に受け、以来町人としての生活を嫌い、公家もどきの生活に明け暮れて渡世のことにかまわず、身を持ち崩すという話である。町人の公家文化への憧れを極端に描いたものである。

多田南嶺『大系図蝦夷噺』（寛保四〈一七四四〉年、京刊）巻二の二「歌学の宗匠は蛙の歌袋」は、歌の道を志して洛外に庵を結んでいる元商人の随雲法師が、格好だけで歌学の実力もなく、生半可な知識で恥をさらしながらも、西行に自らを擬し、庵号を東行庵とするなどの歌人気取りを、篭居しながら顔を黒く日焼けさせて旅帰りを装ったという能因の説話（『十訓抄』など）を摂り入れて揶揄的に描いたものである。随雲は元商人で僧となって歌道に志し、北嵯峨に庵を結び、「今西行」を気取ったという文坡の師似雲その人がモデルであろう。「名を好める人」（『近世畸人伝』）と言われた似雲が南嶺の諷刺の標的となることは十分考えられてよい。[8]

さらに注目すべきは秋成の浮世草子『諸道聴聞世間狙』（明和三〈一七六六〉年、大坂刊）巻四の一「兄弟は気のあはぬ他人の始」である。奈良の町に軒を並べる墨商人鵜飼や伊左衛門・伊兵衛の兄弟は対照的な気質。兄は世渡りの心がけよい吝嗇気質、弟は万事に高尚を好む風雅志向。その弟は、能を「今春」（金春）に師事し、「連歌は京の花のもとに入門して」「何事を稽古しても最初から論がつき過て、無要の事に念を入れて、金銀を積でも伝授といふ程の事さらへてしまはねば気が済」まない性癖で「古今の三鳥三木・源氏物語に三箇の伝・勢語に七箇の大事と残りなく伝え得」た男である。「聚楽ゆめ物語」の鴻齋そのものだと言って過言ではない。

浮世草子に繰り返し描かれた、歌学志向、上流志向の町人の風雅気質。「聚楽ゆめ物語」はその流れを受けていると言えるだろう。だが、その風雅を揶揄するだけではなく直接戒める秀吉が登場する。これは談義本的な色彩だといえる。しかし重要なのは、「宿直物の袋」の正解を、自説ではないにしろ、自ら受けた伝授の説として詳しく展開するのは、学説を登場人物に語らせる衒学的な〈学説寓言〉であり、都賀庭鐘の初期読本三部作や、秋成の『雨月物語』「仏法僧」などに共通する方法だということである。きわめて限定的であることを承知で言えば、「聚楽ゆめ物語」は、浮世草子から初期読本への過渡期に位置するといえよう。筆者はそれをジャンルとしての「奇談」の性格と捉えてよいと思う。浮世草子から初期読本への過程にはさまざまな現象が見られ、従来の文学史家を悩ましていたのだが、「奇談」を仮設することによって、それらの現象を「奇談」に特徴的な現象と見ることができるのである。

五　〈学説寓言〉の系譜――「奇談」史の一面――

〈学説寓言〉は、浮世草子にはなく読本に現れるものであるが、突然現れたわけではない。「奇談」という器の中で醸成されるの

であり、それは「奇談」史の一面でもあるのだ。だから「奇談」史の中に、〈学説寓言〉の諸相・成長を見出すことができるだろう。たとえば学説の内容が、旧説の丸取りから新説の引用へ、自説を仮託する場合も荒唐無稽なものから注目に値するようなものへという成長をである。むろん過渡期のことゆえ、それは時系列を追って整然と現れてはこないだろうが、ここでは歌学や源氏物語関係のものを例に考えてみる。

『新斎夜語』（梅朧主人著、安永四〈一七七五〉年、大坂刊）は九話中七話が〈学説寓言〉とみなされるものである。そのうち日本古典論は第六話（徒然草）・第八話（源氏物語）であるが、第六話については徳田武が『当世下手談義』巻四「鵜殿退卜徒然草講談の事」の影響について述べ、初期読本と談義本の交渉という視点を提示している（「新斎夜語と談義本」『日本近世小説と中国小説』青裳堂書店、一九八七年）。源氏物語が題材となる第八話「嵯峨の隠士三光院殿を詰る」のあらすじは以下の通りである。

三條西実澄（＝実枝。『明星抄』を著す）は当家三代にわたる偉業である源氏物語注釈に力を尽くしたが、晩年に官を辞し、嵯峨に隠棲する。ある日山路を歩く途中、草庵に七十余の隠者があった。隠者は年来源氏物語を読んでいるといい、三條西殿と知るや、千載一遇の機会と日ごろの疑問を述べて教えを乞う。①冒頭に「いづれの御時」と書かれているのはなぜか。②紅葉賀巻に「おそろしくも、かたじけなくも、うれしくも、あはれにも」と書いているのはどういうことか。③紫式部が石山寺に通夜して仏前の般若経に須磨明石巻を書いたという説はどうか。実澄の答えは中世源氏学の常識を踏まえた答えだったが、隠者はその答えに不満であり、「そういう答えなら、河海抄・花鳥余情にも記している」という。実澄は逆に隠者に説ありやと問う。①については桐壺は玄宗に更衣は楊貴妃に准ぜられるので朧化した。②は源氏の御心の、自らの身の上おそろしく、御門の事がかたじけなく、冷泉院が生まれたのがうれしく、藤壺の御心をおもいやって哀れに思ったのだという。③は、源氏物語は寓言にして、なきところに事を設けるので、空即是色である。色即是空を説く般若経の裏を返したのだと。この珍説に実澄も閉口して、「汝の説は鑿説で堂上家には用いない」という。隠者は、では『源氏秘訣』の「子のこの餅」に左伝の絳県の節を引くのをなぜ鑿説と退けないのか、私の説が下民の詞だから用いないのは大道にもとる、と説教する。

本話の主意が末尾の「下民の詞も用いよ」の部分にあると考えるのが、常識的な談義本的読みと思われるが、ユニークな源氏私解の開陳が狙いであることは明らかである。ここでは『源語秘訣』の説が穿ち過ぎだという作者の意見が代弁されているのが注意される。「聚楽ゆめ物語」の秀吉が『源語秘訣』に拠っていたことがどのように受け止められるかが示唆されるからである。

前掲拙稿「上方の「奇談」書と寓言―『垣根草』第四話を例に―」で触れた、『垣根草』（明和七〈一七七〇〉年、京刊）第四話

「在原業平文海に託して冤を訴ふる事」も〈学説寓言〉である。三条西実隆に学んだ禅僧の文海の夢中に、在原業平が現われ、伊勢物語や業平の「ちはやぶる神代もきかずたつた川からくれなゐに水くくるとは」の和歌を論じる。伊勢物語の解釈は中世以来の業平放蕩説・観音化現説を否定したものであり、和歌の解釈は賀茂真淵の新説を取り入れたものであったことは論じた。学説が生な形で議論されるわりには、業平自身が名誉回復を試みるという趣向によって小説的な面白さを壊しておらず、作者の筆力を感じさせる。すでにふれたが、秋成の「ぬば玉の巻」（安永八〈一七七九〉年成、天明元〈一七八一〉年、大坂より出版出願）の構成はこの『垣根草』第四話に酷似している。表にして示すと次の通りである。

	『垣根草』第四話	『ぬば玉の巻』
時代設定	天文のころ	足利の末の世
場所	吉野	明石
話し手	業平	人麿
聞き手	文海（実隆門人）	宗椿（肖柏門人）
問答形式	夢中問答	夢中問答
問答内容（前半）	伊勢物語と業平像の誤謬を正す	源氏物語と光源氏像の誤謬を正す
問答内容（後半）	「ちはやぶる神代も聞かず たつた川からくれなゐに水くくるとは」の歌の解釈	「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれゆく舟をしぞ思ふ」の歌等の解釈

こうしてみれば、「ぬば玉の巻」もまた〈学説寓言〉の系譜に連なる。『春雨物語』の「海賊」もまた同断、もはやくどくどと説明する必要はないだろう。『春雨物語』は文化年間の成立であり、私のいう「奇談」のジャンルからは離れるが、「奇談」書の中にこの一編がおかれても、進化した〈学説寓言〉として抵抗なく受け入れられることだろう。

このように見てきたとき、日本古典を題材とした〈学説寓言〉が上方でひとつの流れをつくっていることがわかる。それは上方の「奇談」史（あるいは「奇談」書のなかのひとつとしても捉えることのできる初期読本）の一面でもある。江戸の「奇談」書でこのようなものが皆無ではないだろうがほとんどないと言ってよい。古典学の伝統を担う堂上の人々、それに憧れる風雅志向の富裕町人の存在を背景にもつ上方にこそ、この系譜が見出せるのは当然というべきだろう。

注

（1）中村幸彦「桜姫伝と曙草紙」（『中村幸彦著述集〈第六巻〉』中央公論社、一九八二年、初出は「国語国文」一九三七年八月）。富士昭雄「『宿直草』『御伽物語』の諸本」（「駒澤国文」第十八号、一九八一年）など。

（2）拙稿「奇談から読本へ」（『日本の近世12』中央公論社、一九九三年）、同「『奇談』の場」（「語文」第七十八輯、二〇〇二年）。

（3）近世散文における寓言論については、中野三敏「寓言論の展

開」（『戯作研究』中央公論社、一九八一年）が詳しい。

（4）文坡については浅野三平「大江文坡の生涯と思想」『近世中期小説の研究』（桜楓社、一九七五年）、中野三敏「大江文坡のこと」「経済往来」一九六五年七月号等参照。

（5）この点、中野三敏先生のご教示による。

（6）似雲については土橋真吉『河内先哲傳』（全国書房、一九四二年）など参照。

（7）たとえば『槐記』享保十二年八月晦日に猪苗代兼竹の話として、次のような挿話が録されている。連歌の席で秀吉が「奥山に紅葉ふみわけなくほたる」としたところ、紹巴に「蛍の啼く」という証歌はないと指摘され、秀吉は不興であった。そこに細川幽斎が居合わせ、「蛍の啼く」という証歌を披瀝したので、秀吉は大いに機嫌をよくした。翌日紹巴が不調法を詫び、該歌が何の集に入るのかを問うと、幽斎は「アレホドノ人ニ何ノ証歌所ゾヤ。キノフノ歌ハ我等ガ自歌也」と言ったという。秀吉程度の人間に証歌のことなどどうでもいいといわんばかりの幽斎の態度である。同書は近衛家熙の話を、頻繁に家熙の許に参上した医者の山科道安が聞書したものだが、江戸時代中期においても、堂上側から見た秀吉がどういう存在であったかということを推測させるに十分な記事であろう。『常山紀談』にも類話がある。

（8）似雲の風雅は西村遠里『雨中問答』（安永七〈一七七八〉京刊）巻二においても、揶揄的に描かれている。

〔付記〕

『怪談とのゐ袋』の翻字を許可くださった京都大学附属図書館、資料閲覧でお世話になった神谷勝広氏・内藤記念くすり博物館に深謝申し上げます。なお、本稿の一部は「近世後期江戸・上方小説における相互交流の研究」共同研究会（二〇〇五年八月三〇日、於広島大学）において発表しました。席上貴重なご意見を賜った研究会メンバー諸氏に深謝申し上げます。また文坡のことについてご教示を賜った中野三敏先生に深謝申し上げます。

附、『怪談とのゐ袋』巻一の一　翻字

【凡例】

一　底本には京都大学附属図書館所蔵本を用いる。

一　漢字表記は原則として新字体とする。

一　濁点・句読点・引用符を私に補ったところがある。

一　振り仮名は原本通りとする。

【翻字】

都聚楽旧地ゆめ物語の事

明和みつ戌の年、都の東岡崎といふ処に難波津のよしあしの世話を子にゆづり、世を遁れて柴の庵幽かにすみなせど、朝夕のけふり豊に龍田鴻齋と号せる有徳の隠士あり。和歌の道に志しあつく、つねにまじはる友どち敷しまの奥義を論じてはおのれ喜撰法師もおさ〳〵をとらじと、わが庵は都の東にありながらたつみあがりな声して源氏伊勢物語つれ〳〵古今などの秘事を語り、此道しれりと自讃がほする。類をもて友とすれば友となる人もある広き世の中、頃はむつき廿日のすへつかた、鴻齋が友に松山春甫・池田立庵といへるものありしが、三人打つれて北野の聖廟にもうで帰るさ、下の森に寛通上人のひらかれし転輪寺の茶所に立より、しばし道のつかれをいかふ折から、聚楽といふ所にふかく知音とする尼崎少休といへる老人、おもはずも此茶所に来り、たがひに顔見あわせ、まづ春のことぶきをのべて、鴻齋少休にむかひて申けるは、「けふは日もたかければ、貴翁の庵に立より年始の礼も申さんとおもひし。これはよきところにて逢けるものかな」と語れば、少休大きに悦び、「それこそ愚老が心の通ぜしものかな。明日は麁茶をしんぜたく、わざ〳〵使を以て申べき所、かく三

人ながら打そろひ来り給ふこそ嬉しけれ」とて、それより少休が聚楽の庵にともなひ帰り夕飯をもうけぬれば、遠寺に初夜をつく。少休かねのをとを聞て、「いざやこよひははやくやすみたまへ。けふは遠路をあるきたまへばさぞやつかれ給はん」と、よるの物とり出して三人をふせさせける。三人けふのつかれにや、枕とるとはや前後もしらずふしぬ。しばしありて鴻齋・春甫・立庵と三人をゆり起すに驚き、三人一同にをきてみれば上下さはやかに着たる少人枕の上にたてり。「こはいかに。宵に見ざりし少人なるが」と、心をしづめ四方をみればさも広大なる金殿玉楼あたりかゝやき、さながら天子・将軍の御所ともいゝつべき結構なり。三人わが身をみれば、いまゝで臥具ひきかづき臥居たりしに、臥具枕やうの物もなく、本より少休の庵のさまはかたばかりもなし。「こはいかに」と三人茫然として暫時立かねたるを、かの少人「はやく〳〵」とひき立て奥の方へともなふに、長廊下を渡りてひとつの宮殿にいたれば、奥の上段に威たかく衣冠せる人、御簾たかくまかせて座したまへば、左右に列座せる人も凡人ならず見へにき。三人はつと平伏しながら、彼少人に、「あれにわたらせ給ふはいかなる御方なりや」と尋ぬれば、かの少人ささやきけるは、「あれこそ殿下豊臣秀吉公にて渡らせ給ふ。左右は福島左衛門大夫、片桐市之正、加藤虎之助、大谷刑部、石田治部等」と申時に、殿下、三人をちかく召れ、御盃を下され仰せけるは、「今日汝等は和歌の道に志ふかく歌書をよくじゆくどくすと聞り。我汝等に尋ぬる事あり。源氏物語の榊の巻にあなるとのゐものゝ袋の事はいかゞ心得たるぞ」とはせ給ふ。鴻齋つゝしんで申けるは、「御諚にまかせおそれながら愚意を申上べし。とのゐものゝ袋と申は大内にて番をいたす我役の次第をしらんために札のやうにけづり双六の筒のやうなる物に入て持を申也。源氏の零落せられし時分にて候へば左様のばんなどもなきよしを申にて候ならん」と答申ければ、秀吉公かしらをふらせ給ひ、「それこそ大きに心得たがえる事なり。李部王記に天慶九年九月十日蔵人右衛門尉中原助信が宿直の衣を詔して裂り給ふとあり。是は主上殿上の侍におはしまして助信が身にしたがふ裝の中の紅色すこぶる深かりしを御覧じて詔して裂しめ給ふとぞ。此記にはつゝみと有り。裝の字をつゝみとよむ。たゞ宿衣の袋の事なり。これを源氏にとのゐするものもやう〳〵稀になりしといはんとてとのゐものゝ袋おさ〳〵みえずとは書り。若紫の巻にも宿直袋とりにつかはすとありて、ことなる義にあらざれども、秘事と云伝へたり。汝等つね〴〵ことなることのやうに人に伝授秘伝などゝて人をあやまたしむ、已後かゝる虚事を伝へて人をまどはしむ事なかれ」と、殊の外いましめ給ひて御簾さがりぬ。三人大きにおそれて流るゝ汗身をしたし御前をたつとおもへば忽ち夢さめて、尼崎少休が庵の奥の間に三人臥ゐたり。こは〴〵三人同じ夢を見しことをあるじに語れば、少休手をうつて「扨も〳〵不思議なるかな。われ此聚楽に来り住居してよりすでに三年になりぬ。まれに客を一宿させぬるたびごとに十人が十人ながら太閤秀吉公の聚楽の御所にまいりし夢を見る、しかしそのゆめみるところは奥の一ト間のみ。外の間にふすもの更にみず」とかたりけるぞ。

—本学大学院教授—